自転車

さやはち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自転車

【Nコード】

N5456K

【作者名】

さやはち

【あらすじ】

何もかもやる気をなくした俺の目の前に、またあいつが現れた。バンブオブチキンの「車輪の歌」の2次創作です。

(前書き)

また長くあきました。

今回はバンブオブチキンの「車輪の歌」の二次創作です。

午前中に降った雨は、道々に多くの水溜まりを作っていた。避けることは、それほど難しくなかったが、面倒くさくなって、無視して歩くことにした。靴も靴下も濡れてしまったけれど、そんなこと、どうでもいい。

あの日を境に、俺はずっとこんな調子だ。なにかもどうでもいい。受験だと大騒ぎして勉強しているやつらみたいにする気はないから、成績は悪かった。だけど、そこまでバカをやる気もないから、同じような成績のやつらといてもノリが悪いと醒められることが多い。でも、それもどうでもいい。あいつに会えなければ、学校なんて来たって意味がない。もう会えないあいつに……

空は対照的に晴れ渡っていて雲ひとつなかった。西日でキレイな夕日ができている。

そういえば、あいつがいなくなったあの日も、今日のような、午前中で雨がやみ、午後はよく晴れた日だった。

俺、外村正也は地元の公立中学に通っていた。そのときから勉強はできなかつたけれど、今と違ってそこそこ楽しい生活を送っていた。

「おはよー！」

その日も学校にいくと元気な声が飛んできた。水島真理子、小・中とずっと同じクラスの幼馴染だ。

「ああ」

俺の返事はいつもそれだけだった。小学生の頃からいつも同じで、真理子もそれしか返ってこないのは分かっていて。返事を返すときちょうどチャイムがなった。

「また、ぎりぎりじゃん。毎日毎日懲りないねえ」

自分の席に着いた俺の前で、腰に手をあて、呆れた声を出していたが、顔はからかうように笑っていた。

「うるさいなあ。走ればもっと余裕で間に合うよ。今日は雨が降っ

てたから……」

「あたしは、雨が降っていようとも、晴れていようとも、歩いて間に合ってますが？隣の家なのに」

「ここぞとばかりに言い放って、勝ち誇ったようにそいつは笑った。

「もうちよつと早く起きたほうがいいんじゃないの？それとも呼びに行つてあげようか、昔みたいに。ま〜さ〜やく〜んつて」

昔は隣ということもあって、一緒に登下校をしていた。小学校低学年くらいまでは、一緒に道草をくって遊びながら帰っていたが、いつの間にか、学校以外では別々に過ごすようになっていた。

「うるさいつての。早く席つけよ。チャイムなつてんぞ」

「ハイハイ」

まだ担任はきていなかったが、言いたいことが言えて満足したのか、さつさと自分の席に戻っていつて隣の席の滝口亜矢とおしゃべりを始めた。やつと行つたと思つたら、今度は後ろから声が飛んできた。「いいなあ、おまえは。」

長谷川高志だ。

「いつつも、真理子ちゃんに声かけてもらえて。俺なんかまだ一回しか話したことないのに。同じクラスになったのにたつたの一回だぞ。一回」

真理子は男子生徒に人気があつた。それもクラス・学年に制限なく多くの男子生徒に。そして親友の亜矢もまた人気があつた。この二人が学校の人気を二分していて、高志は真理子派、俺は亜矢派だった。

「嘘だろ？毎日毎日、たまつたもんじゃない」

「バツ、バカ！なにをもつたいないことを。いいかよく見てみるよ、あの……」

こうしてこの日も、『長谷川的真理子論』を聞き流して俺の日常が始まった。俺の視線の先には、真理子と亜矢。シヨートで活発な真理子とロングヘアーでおしとやかなの亜矢。俺としては亜矢の方がタイプだったが、あまり話したことはなかった。逆に高志は、二年

間同じクラスだったこともあってか、よく話しているのを見かけた。このときはよくそれをうまくいかないものだと思っていたが、その日は違う形でそう思うことになった。

「水島、前へ」

その一言で、その日がいつもと違うものになった。それまでろくに話も聞かずに帰り支度をしていたクラスの注目が、真理子に集まった。真理子はその中うつむき加減に教壇に向かった。

「あゝ、突然ではあるが、水島は、お父さんの仕事の都合で、外国に行くことになった。その都合で、みんなとは今日でお別れだ」

教室中に驚きの声が渦巻いた。隣に住んでいる俺も知らなかった。

「ハハ、えつと。前から決まっていたんだけど、みんなとお別れする時間が長いと、とつてもつらくなりそうだったから。ごめんね。みんな今までいろいろありがとうございました」

そういつて深々と頭を下げる真理子を前に、もう誰も声を上げるものはいなかった。しんと静まり返る教室に、担任が、

「あゝ、まあ、そうゆうことだ。水島も向こうに行ってもがんばってな。よしっ、終わるぞ」

その声で号令がかかる。みんな流されるままにそれに従い、終わるとみな一斉に真理子のもとに集まって人だかりができた。俺も近づこうとしたけどできなくて、

「まり…」

と呼ぼうとしたら、肩をたたかれた。振り向くとそこに立っていたのは亜矢だった。

「あ、あの、ちょっと話があるんだけど、今からいい？」

いつもなら願ってもない話だがそのときはそれどころではなかった。だいたい真理子の親友のはずなのにまったく動揺してない。このことを知っていた？

「え？えつと、今は…」

軽く混乱しながら言いかけて振り返ると、いつの間にか真理子が近くまで来ていた。

「行ってあげて。亜矢、ずっと悩んでたんだから…がんばれ〜まさやあ〜」

いつものようにからかうような笑顔で言われたが、

「あ、ああ」

返した言葉は、いつもどおりにはできなかった。

話があると連れて行かれたのは、体育館の裏だった。分かりやすい。いつもなら舞い上がりそんな状況なのに、俺の気持ちはまったく別の方向をむいていた。真理子のことになって、あせっていた。

「あ、あの…その…ごめんね、こんな所に呼び出しちゃって…その…ずつと言いたいことがあって…あの…」

俺の気持ちとは裏腹に、亜矢の声はゆっくりとしていた。

「あの…あんまり話したことなかったけど…その…入学したときからずつと…その…外村君のこと…いいなと思ってて…その…あの…」

『あの』とか『その』が多かった。気持ちは分からなくなはなかったが、いい加減イライラし始めていた。返事ももう決まっていた。

「その…ずつと好きでした。付き合ってください」

やつと言った。そう思ってさげられた頭に口を開きかけて、体育館の影から裏門に向かって走っていく人影が見えた。真理子だった。

その瞬間、俺の口から声が出なくなった。真理子が泣いていたように見えたから……………

結局その後、亜矢に向かって俺の口から出た言葉は、断りの言葉だった。彼女は、それが分かっていたかのように、これからはただのクラスメイトではなく、友達になって欲しいとだけ言った。それから卒業まで、前にはなかった簡単な会話ぐらいはするようにになった。

その日以来もう真理子とは会っていない。亜矢は今、有名な私立進学校に通っているらしい。俺とは大違いだ。他のクラスメイトも、二・三日は真理子の話をしていたが、すぐに普通の生活にもどって

いって、そのまま卒業していった。高志も例外ではない。ただ一人、今でも気持の整理がつかないままなのは、俺だけだった。

靴からグジュグジュといやな音がし始める。でも、もう家が見える位置まで来ている。もう少しの辛抱だ。ふと真理子の家の前を通り過ぎるときに足をとめてみる。しかし、人が使った気配はない。

あの日以来、こんな日には足を止めてみるけれど、いつも期待は裏切られる。今日もがっかりして自分の家の門を通ろうとしたとき、「あ！帰ってきた！」
自分の耳を疑い、顔を上げる。

「なにしょぼくれた顔してるの？私がいなくてそんなに寂しかった？」

家の前にある俺のさび付いた自転車に座っているのは、間違いなく真理子だ。涙をおさえるのにしばらく声が出せない。

「帰ってきたのか？」
やっと出せたのはそんな言葉だった。

「ううん。そうじゃないの。日本と外国って学期が始まるのが違うんだって。だから今まではおばあちゃんのうちと向こうを、行ったり来たりしてたんだけど、明後日また向こうに行ったら、今度はもう学校始まつちゃうから」

最後に来たのが自分のところだった喜びとすぐにいなくなってしまう現実で複雑な気持ちになる。

「だから、最後に正也に甘えに来た……いいよね？」

硬い表情。こんな顔を今まで見たことがなかった。

「ああ」
必死になってだしたのはいつもの言葉だった。

「よし……もうその返事もおしなよ。いつまでもそのままじゃだめなんだから」

表情を緩めてからかかってきた真理子は、いつもの真理子だ。

「じゃあ、今から商店街にしゅっぱーつ。かばん置いて。自転車出して。早く、早く」

はしゃぐ真理子に合わせて、自転車がキィキィと音を上げる。

「ええ？今からかよ」

「文句言わない。商店街ならすぐに行つて帰つてくれるでしょ。ほらほら、急いで」

「ハイハイ」

そんなやり取りをしながら、かばんを置いて、真理子を後ろに乗せたまま出発する。肩に真理子の手のぬくもりを感じて、今ここに真理子がいることを実感した。

商店街では、真理子は有名人だった。小さい頃からよくおつかいに来ていたからだ。真理子は、いろんな人に声をかけられて、お別れを言っていた。みんな別れを惜しみ、饞別だと商品をくれたりした。中には涙を流す人もいた。

そうこうしているうちに、日が暮れてきた。俺の腕にも、自転車のかごにも、もう荷物を入れる余裕がない。それを聞いた真理子は、「そうね。もう大体の店に行つたし……あ！忘れるところだった！」
そういうと真理子は走つていってしまふ。俺が、慌てて重くなった自転車を引きずりながら、追いかけていくと、真理子は小さな雑貨屋のショーウィンドウを覗き込んでいた。店のドアには準備中の看板がかかっていた。

「き、急に走るなよ。…どうしたんだよ。何か欲しいものでもあったのか？」

「うーん、そうだったんだけど……もう売れちゃつたみたい。今日はやつてないみたいだし……欲しかったんだけどなあ。あのかばん……」

そう言つてショーウィンドウを見つめる真理子は、本当に残念そうだ。でも開いてないんじゃないかなあ、と思つて店のドアを押してみると鍵がかかつていなくて、少しあいた。

「どんなのだよ、そのかばん」

「ん？えつとね、緑色で普通のシオルダーバックより少し大きめのなんだけど……前はここに置いてあつたんだけどなあ……」

最後はつぶやくようにいった真理子をおいて、俺は中に入った。

店の中は、女の子うけしそうなかわいいアクセサリーから、怪しげな仮面までいろいろなものがあるのが棚を埋め尽くしていた。その狭い店内の一番奥のカウンターに、おじいさんがちよこんと座っていた。

「あー、すみません。以前この店のショーウィンドウに緑のシヨルダーバックがあつたと思うんですけど、もう売れちゃつたんですか？」

近寄って一応大きめの声できいてみた。ちゃんと聞こえたかなと思つてみると、意外とはつきりとした声で返事が返つてきた。

「売れてはいないんだがね」

「え？あるんですか？」

「いや、アレは予約があつてね。売れないんだよ」

予約か、そりゃ他には売らないよな……でも、こつちもそう簡単に諦めるわけにはいかない。

「どうしてもだめですか？」

「だめだ」

「今の財布の中身、全部出しますから」

「だめだ」

「お願いしますよぉ」

「だめだ」

「いったい、どんな人が予約していったんですか？」

とりあえず、粘るためにそんなことをきいてみる。

「いや、正確には予約していったんではないんじゃない。半年ぐらい前までな、よくこの商店街におつかいに來る女の子が、そのかばんを欲しがつていての。よくこの店に來て、話し相手になつてくれるやさしい子だつたんじゃない。じゃが、そのこが突然引越してしまつての。いつかまた來たときにあげようと思つて、このかばんは大切に置いてあるんじゃない。だからこれは売れん」

カウンターから出し、なでたかばんは、たしかに手入れがいきとどいていた。でも、この近くでそんな女の子は、俺は一人しか知らない

い。

「おじいさん、その女の子って、もしかしてあいつのことじゃない？」

そういつて俺が入り口のほうを指差すと、おじいさんの顔に驚きが浮かび、そしてうれしそうにほころんだ。

店を出ると、真理子は入る前とまったく同じ格好をしていた。

「ほれ」

「え？うそ！どうして？」

目の前にかばんを差し出すと、真理子が喜びの声を上げた。

「売れたんじゃないかって、店の人がお前にあげようと置いておいてくれたんだよ。話し相手になってくれたのがうれしかったんだよ」「かばんを渡してやると、真理子はそれをうれしそうに抱きしめた。

「そっか、あのおじいさん……あ、お礼言わなきゃ。もう一回入ろう」

そう言うて入りかけた真理子の肩をつかんでとめる。ここからはおじいさんに頼まれたことだ。

「いや、お前がすぐにいなくなるって言うたら、じゃあもう会わないほうがいいだろうって。別れがつらくなるからって。お前に、今までありがとう、体に気をつけて、だつてさ」

「そんなあ」

真理子が力なくつぶやく。

中から外の様子を見られたが、こちらからは見えない。だが、この店の主人は、今もこちらを見ているはずだ。真理子はしばらく考えて、店の中に向かって頭を下げた。

その日、真理子は外村家で夕食をとった。うちの親は、昔話をしたりして、別れを惜しんだ。夕食が終わって、家にもどる真理子を送る。真理子の家はそのままになっていて、真理子たちがむこうに落ち着いたら、親戚が引き取りに来るらしい。

「あゝ楽しかった」

「ああ」

「おばさん達いろんなこと覚えてたね」

「ああ」

夕食を食べている間も、そして今も、真理子はずっと笑顔のままだった。

「明日は学校休みだよな？祝日だから」

「ああ」

「じゃあ、明日もよろしくね」

「ああ」

「んじゃ、おやすみ」

「ああ」

家の前で別れるときも真理子は笑顔だった。俺のほうは、せめて少しでもと思って、門から玄関に向かう真理子の背中を見つめていた。真理子がドアノブに手をかけたところで帰ろうとすると、

「ありがとうね」

さっきまでとは違う真理子の声が追ってくる。振り向くと、真理子はまだ中に入らず、ドアノブに手をかけたまま立っていた。

「今日、雑貨屋で。あのままだったら諦めてたと思う。そしたらおじいさんに悪いことするとこだった……………」

今までに、真理子のこんな声はきいたことがなかった。

「いつも……………いつもだよな。正也、自分のことはいつもぬけてるのに、私が失敗したりしそうになったら、助けてくれる……………おばさんたちと話してたら、いろいろ思い出しちゃった。正也が…私が花瓶を割っちゃったときに一緒に謝ってくれたりとか、財布をなくしたときに、一緒に探してくれたりとか……………ほんと、ありがとうね。もう…もう……………大丈夫だから……………私…ちゃんと一人でやっていけるからね……………おやすみ」

そう言っつて真理子は家の中に入っていった。俺はしばらくその場から動けなかった。

次の日、俺はその声で目が覚めた。

「ま…さ…や…く…ん」

時計を見ると、午前十時。迎えに行くつもりで、起こされてしまった。大慌てで着替えて下に降りていくと、昔と一緒ねと母親にからかわれた。無視して食パンをかじって、歯を磨いて外にでた。

真理子は、昨日と同じように自転車に腰掛けて待っていた。肩には、昨日のかばんがかかっている。

「お、おはよう。おまたせ」

「遅い！これじゃ昔と一緒じゃん。いや昔より遅い！また私の声で起きたなあ。いい加減その寝坊癖直さないよ。もう誰も起こしてくれなくなるよ」

立ち上がってお説教。またいつもの真理子だ。

「いいだろ、別に。だいたい起こすつもりで叫んだんだろ？だったらいいじゃんちようど」

「そうだけども。まあ、いつか。そのうちなおるでしょ。今日は、小学校と中学校に連れて行って」

真理子が自転車に座りなおして、俺達の二日目が始まった。

まず、小学校に向かった。職員室に行って少し話をした後、許可を得て校内をまわらせてもらうことにした。真理子は喧嘩したこととか、遊んだこととか、よく覚えていた。

俺たちはすべての教室に行つて、最後に屋上に出た。真理子がかばんから弁当を取り出し、ここでそれを食べることにした。

「いただきますーす」

「んむ…………お、なかなかうまいじゃん」

「ほんと？よかった。朝から大変なおもいした甲斐があつたよ…………んむ」

「あ、でもこの玉子焼き、しょっぱい」

「うそお？んむ…………げえ、ほんとだ」

しばらくはそんなことを話していたが、次第に真理子の口数が少なくなつていった。俺も食べることに専念する。

食べ終わると、真理子が先に口を開いた。

「明日ね…………早い電車に乗っていくから。飛行機早い便だし…………」

…正也も学校あるしね」

「空港まで送っていくよ。おばさんたちともそこで合流するんだろ
うっ。」

学校なんて休むつもりだった。親もこれなら許すだろう。

「うん……………でも、雑貨屋のおじいさんじゃないけど、別れるの
がつかなくなると思うから……………あ、でも、駅までは送っていつ
てよ」

「……………ああ」

ホントはギリギリまでおくっていきたかったけれど、それ以上何も
いえなかった。俺たちはそのまま、あまり言葉を交わすことなく小
学校を出た。

午後からは、中学校にいった。校門に自転車をとめ、職員室に行
ったが誰もいなかった。警備員に話を聞くと、みんな午前中で帰っ
てしまったそうだが、校内を見てまわることは許してもらえた。で
も、ここでも二人の間に会話はなく、ぎこちない空気のまま、また
最後に屋上上がった。

日は傾き始めていて、広がり始めた雲を赤く染めている。屋上の真
ん中あたりまで行った真理子が、立ち止まって振り返りかえる。後
ろについていていた俺も立ち止まり、視線を夕日に逃がす。真理
子も夕日を見て、

「きれいなね」

「ああ」

「でも、曇ってきたから雨が降るかもね？」

「ああ」

しばらく黙って二人で夕日を見つめる。その間にも雲が広がって
いく。

「……………ねえ？亜矢とはどうなった？告白されて、今でも続いているの
？」

「いや」

考えていた答えと違ったのか、真理子が俺のほうを向く。

「正也も亜矢の好きなんじゃなかったの？」

「いや」

「やっぱりいつもの返事じゃないんだね。いつもみたいに言うと思っただのに……………」

「告られるまではそう思ってた。でも、そのとき他の人が好きだった気づいたんだ。だから断った」

「え？……………だれ？」

「そいつは……………いつも笑ってて、長いこと一緒にいたけど、あまり泣いたところ見たことなくて……………悲しくても笑ってるようなやつで……………いつも俺に意地悪してきて……………」

「それって……………」

覚悟を決めて真理子と向き合う。

「ああ。俺は真理子が好きだ。いなくなるってなってはじめて気付いた。近くにいたから……………ずっと近くにいたから気付かなかったけど、俺はお前が好きなんだ」

世界から音が消え、時が止まったようだった。しばらくの沈黙のあと、

「いこつか。ホントに雨降りだしそうだし」

真理子はそう言って、階段に向かう。俺は、もっと別のことばが欲しくてその場を動かなかったけれど、真理子はそのまま降りていった。仕方なく俺もあとを追って歩き出した。

真理子は玄関を出ずに立っていた。外は雨が降り出していた。

「雨、ふってきちゃったね」

「ああ」

「自転車、ぬれちゃったね」

「ああ」

「……………さっきの話ね」

「……………ああ」

「わたしは……………私はね……………」

「……………」

「うん！決めた！またつき会ったときに言う、私の気持ち」

「はあ？だつておまえ、外国に行くんだぞ？」

「いいの。つき会ったときは、真つ先に私の気持ち言う。それならまた会えそうじゃない。ちゃんとお互いの気持ちがいえそうじゃない。ね？だから約束、いつか、また、会おう」

「……………ああ、そうだな。また……………か」

「いいでしょ？」

「ああ」

「雨、あがったね」

「ああ」

「通り雨だったね」

「ああ」

「……………いこつか？」

「そうだな」

俺らは歩き出した。いつになるか、どこになるか分からないけど、また会うことを約束して。俺らは歩き出した。どちらともなく手をつないで。

次の日、朝早く俺たちは出発した。二人で自転車に乗って、明け方の駅へ。町はまだ静かで、

『世界中に二人だけみたいだね』

と背中から声が聞こえた。

駅に近づき、線路沿いの坂を上ると、おおきな朝焼けが広がっていた。坂を登っている間、騒いでいた俺たちは言葉をなくした。それぐらいキレイな朝焼けだった。後ろから声がかれるのが聞こえた。でも振り返ることはできなかった。俺は泣いてしまっていたから。もし振り返って真理子も泣いていたら、このまま泣いて別れることになりそうだったから。

そのあとも、真正面から顔を合わせることなく、駅に着いた。駅に着くと真理子は無言になった。二人でならんで切符を買うときも、ただ機械的に、券売機に向かって一番端の一番高い切符を買っ

た。俺は反対に、一番安い入場券を買った。

そのまま改札に向かう。自動改札機に切符を入れて、真理子が通ろうとすると、かばんの紐が引っかかった。真理子が俺を見る。俺は目を合わせないでうなずいて、まるで嫌がるように引っかかるかばんの紐をはずした。

電車はすぐ来た。ベルとともにドアが開き、電車に乗って、真理子はやっと口を開いた。

「じゃ、いろいろありがとね」

「ああ」

俺は相変わらず顔を合わられず、うつむいて答えた。

「かばん、大事にするからね」

「ああ」

再びベルが鳴り、出発を告げる。

「約束だよ、必ず、いつの日か、また、会おう」

俺はそのまま手を振った。ドアが閉まり、動き出す。それでも顔を上げられない。だって………だって真理子の声は………震えていた。泣いていたんだ。

俺は走った。改札を抜け、自転車に飛び乗った。まだ………まだあの坂道でならべる。

「真理子！真理子！」

ゆっくりと離されていく。でもあと少し、あと少しでいい。電車の窓が開き真理子が見えた。

「約束だぞ！必ずいつの日か、また、会おうなあー！」

両手をハンドルから離して、真理子に見えるように大きく手を振った。電車はスピードを上げ、どんどん小さくなっていったが、最後に真理子の笑顔が見えた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5456k/>

自転車

2010年10月21日22時07分発行